

須弥山を芥子の中に入れる（けしのなかにいれる）」。この言葉は仏教の宇宙觀で、須弥山は人間の身の丈ほどの大きさで、芥子は人間の身の丈ほどの大きさの粒である。芥子粒（けしころ）は、この大きさの粒を、その大きさの芥子の中に、須弥山を入れる事である。

芥子粒

定方 晟

仏教の講義をしていると、「須弥山を芥子の中に入れる」という言葉を口にする場面が現れる。年輩者なら、この言葉の意味を理解してくれるかも知れない。しかし、若者にはチンパンカンパンであるにちがいない。須弥山てなんだ。何かをけしの中に入れると、そんなことにどんな意味があるのか、と思うだろう。けしといえば、麻薬の原料としか思わないひとにとって、この言葉の意味がわからないのは当然である。

1. けしと仏教

須弥山とは仏教の宇宙觀で宇宙の中心に聳える巨大な山をいう。けしとはけしの種をいい、小さなものの代表である。須弥山をけしの中に入れると、極大なものを極小のものの中に入れることを意味する。これは現代人にとっては理解しがたい言葉であろう。現代人はすべての存在の根本は物質であると考えるからである。精神すら神經という物質や電流という物理現象に還元して考えるからである。現代人にとっては、物から心が生じるのであって、その逆ではない。そして大は小に納まらないという物質界の法則にしたがって、「須弥山を芥子の中に入れる」という言葉を独りよがりのたわごととするのである。

だが、仏教からみると、物から心が生じるという考え方こそ、批判的精神を欠いた単純な思いこみにすぎない。仏教はつぎのように教える。あなたは富士山を見る。富士山はあなたの目の中にある。あるいはあなたの心の中にある。たぶん、あなたはこのとき、あなたの長年なじんだ習慣に従って、富士山は自分の外にあると考えようとするだろう。しかし、あなたがそのように考えようとする前には、富士山はあなたの外になかったことは確かなのだ。巨大な富士山はあなたの小さな瞳の中にあったのだ。このことを教えようとして、仏教は「須弥山をけしの中に入れると」というのである。

しかし、誤解のないように付け加えておこう。仏教は、だからといって、富士山があなたの中にあるということを最終的な結論にしようとするのではない。あなたが富士山はあなたの外にあると考えているから、その思いこみを打ち碎くために、ショック療法をおこなうのである。仏教は、富士山があなたの外にあるとも、中にあるともいわない。

あなたはまた驚くに違いない。外にあるのでなければ、中にあるのではないのか。中にあるのでなければ、外にあるのではないのか、と。あなたがそう考えるのは、あなたが矛盾律を盲信しているからにすぎない。矛盾律という難しい言葉は知らないとも、あなたはそれに従った考え方をしているからにすぎない。言葉を使用する人類はみな知らず知らずそのような考えに陥っている。「大きい」と「小さい」、「良い」と「悪い」など、対立的な言葉を子供のころから聞かされ、使いつづけているために、そのような思考法になれきってしまったのである。西洋では学者が矛盾律という学術用語すら作ってこの盲信を権威づけている。

人は反論するかも知れない。われわれだって、「大きい」と「小さい」のほかに「そのどちらでもない」を考えることができるよ、と。では借問する。「ある」と「ない」について、「そのどちらでもない」をあなたは考えることができるだろうか。できないだろう。仏教はそれをすら考えることができる。特別の場合にだけ「どちらでもない」を考えることができるのではなく、あらゆる場合にそれを考えることができる。それが空の思想なのである。矛盾律を信奉するひとは、空とはまさか有のことではあるまいから無のことであろうと誤解する。空は有でも無でもないのである。

現代人にこの考えが理解できないのは、現代人が言葉を盲信し、言葉を天來の特殊な存在のように考えているからである。言葉は人類がより強く生きるために進化の過程で獲得した道具である（別に意識して獲得したわけではないが）。それは生きるための道具という意味では猛獸における爪牙や蜂における毒針と同質のものである。

われわれは自分の嬰児時代を想起してみよう。われわれはそのとき、「大きい」「小さい」、「良い」「悪い」、「ある」「ない」などという考えをもったことがあるであろうか。われわれはそのときそのような概念には一切無縁であった。われわれはそれをわれわれが未熟であったからだと考えたがる。だが、そのようなあり方こそ真のあり方ではなかったのかとなぜ疑ってみないのか。成人した人間こそ虚構の世界を創って生き、その世界を真実絶対の世界と錯覚しているのではないかと、なぜ（ふとでもいいから）考えてみないのか。宇宙は有限か無限か、死後の世界はあるかないかという問題は数千年來議論されつづけていながら未だに決着がつかないのはなぜかとどうして考えてみないのか。仏教からみれば、それらの議論は言葉が作る虚構の世界を真実の世界と思い誤ったひとたちの空しい営みにすぎない。

カントは空間と時間は認識の形式であるといった。かれは空間や時間を実在視しなかった。仏教はさらに徹底して、いかなるのもをも実在視しないのである。

われわれと富士山の関係に話を戻せば、仏教の考えはこうである。富士山はわれわれの外にあるのではない。われわれの中にあるのではない。ただありのままにあるのである。「ありのままにある」とは、われわれが意識を発動する以前のもののあり方をいっている。われわれはある物を見て蛇だと思い、すぐに古縄だと気づいたとき、感覚が誤った思いがちである。誤ったのは判断である。ニーチェはいっている。感覚が人を欺くのではない。理性が人を欺くのだ、と。われわれは意識、理性、言葉を過大評価する過ちから目を醒まさなければならない。

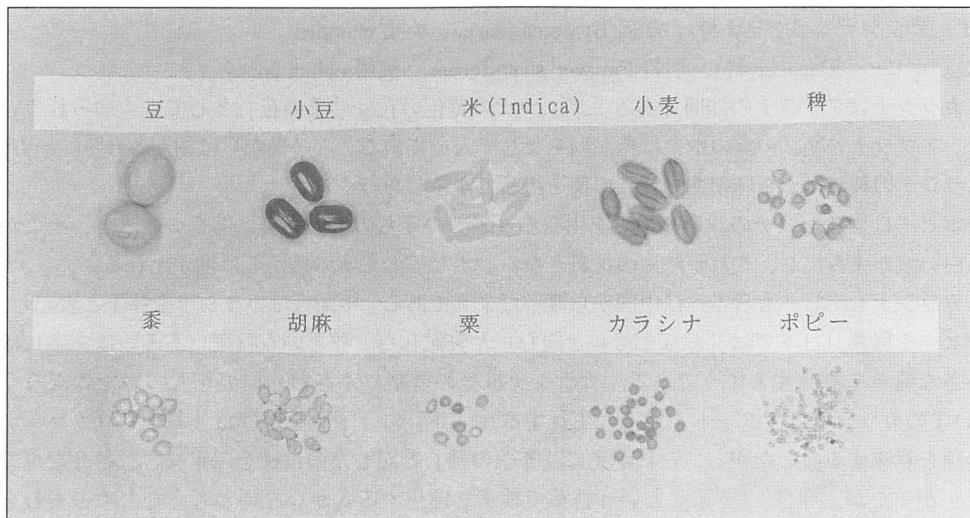
しかし、このような言葉をいくら重ねても、新たな誤解を生むだけかも知れない。仏教はそれを避けるために究極的には言葉の使用を中止する。これを言語道断といい、無念無想という。しかし、言葉をまったく使用しなければ、一般人は誤解もしないが、理解もしない。そこでやむを得ず、仏教でも、多少の言葉は費やすのである。

2. けしと国語辞典

さて、本論の目的は仏教哲学を解説することではなく、けし粒を説明することである。けしは仏典では極微なもの比喩に用いられる。經典はいう。「須弥の高廣をもって芥子の中に納るも増減なし」（維摩經・不思議品）。「よく三千大千世界をもって芥子の中に入る」（首楞嚴三

昧経・巻上)。「たとえば鉄城あり。方一由旬にして高下もまたしかり。中に芥子を満たし、人ありて百年に一芥子を取り、その芥子尽くるも劫なお竟らざるごとし」(雑阿含・第34)。最後の例は「劫」という巨大な時間単位を説明するために持ち出された比喩である。一辺7キロメートルの立方形の大きな城につまつた小さな粒を100年に一度とりだして粒が尽くるまでの時間よりも長い時間をいうのであるが、城につまつた粒の数の多さを強調するために、最も微小な粒である芥子を持ち出すのである。

ところで現代の日本人は小さなもの例えに何を持ち出すだろう。高層ビルの屋上から道路を見下ろしたときは人といふかも知れない。「人間がまめ粒のように見える」と。「まめ粒」の代りに「あずき粒」「ごま粒」という人もいるだろう。しかし、「けし粒」という人は滅多にいないのでないだろうか。現代人はけし粒というものをあまりよく知らない。「まめ粒」や「ごま粒」ならイメージが湧くが、「けし粒」ではイメージが湧きにくいだろう。「こめ粒」という人はいそうな気がする。「むぎ粒」という人はいないかも知れない。現代人は麦を粉の形でしか知らないからである。¹⁾



では芥子の種とは何か。図書館の棚に並ぶ国語辞書を片はしから覗いてみた。どの辞書でも、「けし」の項に「芥子・瞿粟」という漢字が記され、二種類の植物があげられている。しかし、驚いたことに、「けし」という一語がなぜ二種類の植物をさすのかを説明する辞書がない。やっと吉田金彦編著『語源辞典・植物編』東京堂出版、2001年の「けし」の項で、その説明に行き当った。

『源氏物語』に芥子の名が見えるが、それはカラシナの種のことだった。その実の細かな粒が芥子粒に似ているため、名を誤用したもの。宮崎県ではケシのことを誤ってカラシとさえ呼ぶ。ケシは、カラシナの種の漢名「芥子」の字音である。

しかし、この説明はわかりにくい。「芥子」と「ケシ」の区別を明確にしないで説明してい

るからである。一般的日本人は「芥子」と「ケシ」は同じだと思っているから、この説明は混乱を招くだけである。また、「その実の細かな粒（＝カラシナの種）が芥子粒に似ているため、名を誤用したもの」という説明は本末顛倒している。（次節を参照）

小倉謙監修『植物の事典』の「カラシナ」の項には、「芥子」に「からし」とルビがふってある。もし「からし」という言葉が「芥子」の発音に由来する（し=子）といいたいのなら、誤りであろう。「からし」は「辛し」という形容詞に由来すると思われるからである。「子」は種ないし粒を意味するであろう。

このように現下の日本では、けしという言葉の解釈に混乱が起きている。そこで私はけしについて調べてみた。以下はその結果である。

3. けしの実体

まず、2つの植物が問題になっていることを明らかにしておこう。混乱を避けるために「けし」という言葉はできるだけ使わないことにする。

- (1) カラシナ（アブラナ科）、学名 *Brassica juncea*、英語 mustard
- (2) ポピー（Papaver科）、学名 *Papaver somniferum*、英語 opium poppy

カラシナはアブラナの仲間である。アブラナの黄色い花は「菜の花」としてよく知られている。アブラナの鞘状の実の中には種が列をなして入っている。この種からは油がとれる。一方、カラシナの種にはから味があり、この種を潰してからしをつくる。

ポピーは径数センチの球形の果実を生じる。未熟のうちのこの果実に傷をつけると、そこから白い液が染み出し、これが阿片の材料となる。ポピーの果実の種からは油がとれる。

カラシナもポピーも日本へは中国から渡ったようである。中国人はカラシナを芥子と表記し、ポピーを罂粟（日本では「おうぞく」と読む）と表記した。芥という言葉（あるいは文字）は小さな雑草を意味するようである。カラシナはその言葉にふさわしい姿をしていたのだろう（いまのカラシナは1メートル以上に生長する）。「芥」に「子」をつけた「芥子」はカラシナの種を意味する。したがって、私が先に「芥子の種」と記したのは種を二重に含意させた点でまずかったが、今日、「芥子」という言葉で種子を連想する人がいないと考えたためのやむを得ない措置であった。芥子は古代の日本では「かいし」と発音されたに違いない。「けし」は「かいし」の訛であろう。

中国人はポピーを罂粟と表記した。罂とは甕のことで、果実の形が甕に似ていることから採用された言葉（文字）であろう。（ラテン名 *Papaver* は「乳首」に由来し、やはり果実の形に因んでいる。）粟は「あわ」のこと、ポピーの種があわ粒のように小さいことから採用された文字であろう。この植物の名に粟という文字が添えられていることは、ポピーが最初は種を利用するために栽培されたことを表わしていると思われる。とにかく、中国人は芥子と罂粟を混同することはなかった。中国語の辞書を見ると、今日にいたるまで、両者が混同された様子はない。

カラシナもポピーも最初はもっぱら薬用植物とみなされていたようである。仏教経典は芥子を薬用植物として扱っている。すなわち、「三十二味香薬の1つ」（金光明最勝王経・第7）、「芥子はその味辛辣にして、降伏相応の性類なり」（大日經義釈・第7）とある。

4. 微小なものの比喩

カラシナとポピーはともに、その種が微小であるという特徴をもつ。微小なものの例えにされたのはこのうち前者である。これは世界中に見られる傾向であって、バイブルやコーランにつぎのようにある。

また言われた、「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で言いあらわそうか。それは一粒のからし種²⁾のようなものである。地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。(マルコ、4.30～32)

復活の日のためには、特に正確な秤を設けようぞ。誰一人、不当な判定を受けることがないように。たといカラシナ一粒³⁾の重さであろうと、そのまま出して見せようぞ。勘定は我ら独りで全部引き受ける。(コーラン、21 [預言者]、48)

このようにカラシナの種は世界中で微小なものの例えにされ、カラシナが他のものに変えられることはなかった。なぜ日本ではそれがポピーの種と混同されるようになったのだろうか。それはひとえに芥子が「微小な粒」を意味したことによるようである。⁴⁾

芥子を微小なものの比喩として用いることを日本人は仏典から学んだ。この芥子はカラシナの種である。インド語では *sarṣapa* という。Monier-Williams の辞書では、*sarṣapa* は ‘mustard, mustard-seed’ と訳されている。*sarṣapa-kāṇa* は ‘a grain of mustard-seed’ と訳され、動詞 *sarṣapāyate* は ‘to appear as small as a grain of mustard-seed’ と訳されている。

sarṣapa はインドの古典医学書『スシュルタ本集』(3-4 世紀) の中に、消化作用を促す等の効能をもつピパリー (=胡椒) 族の薬物の1つとしてあげられている。(大地原誠玄訳・矢野道雄校訂『スシュルタ本集』<第1巻>谷口書店、1993、p.132)

チャーンドーギヤ・ウパニシャッド(前7世紀頃)にはけしを微小なものの比喩にした言葉が出てくる。

これすなわち心臓の内部に存するわがアートマンなり。米粒よりも、あるいは麦粒よりも、あるいは芥子粒よりも、あるいは黍粒よりも、あるいは黍粒の中核よりも更に微なり。

(Chānd.Up.III.14.3.) (辻直四郎訳)

この文に登場する粒をインド語でいうと、順に *vrīhi*, *yava*, *sarṣapa*, *śyāmāka*, *śyāmāka-tanḍula* である。*sarṣapa* 以外はみなイネ科の穀物である。*śyāmāka* は黍 (学名 *Panicum Frumentaceum*) あるいはその種である。

微小なものを植物の種に例えることはよくあることで、小宇宙と大宇宙が同一であることを説明するために、バニヤンの「小さな種」(*aṇvī dhānā*) に「巨大なバニヤン樹」(*mahān nyagrodhah*) が潜んでいることを語る有名な句がある (Chānd.Up.VI.12.2.)。バニヤン樹とは気

根によって枝を増やし大木となる樹木で、カルカッタの植物園には前後左右に数十メートルも広がる巨大なバニヤン樹がある。

ポピーはインド語では *khasta-tila* あるいは *khaskhasa* という。前者はバーガヴァタ・プラーナ(10世紀頃)に出るようであるが、あまり古い文献には出ないようである。インドでポピーが知られるようになったのは、あるいは身近な存在になったのは、西暦後であろう。とにかく、漢語「芥子」はカラシナを意味したのであって、ポピーを意味したのではなかった。

5. けしの意味——カラシナからポピーへ

ところが、日本では「けし」がカラシナをさすのにも、ポピーをさすのにも用いられるようになった。いな、けしがカラシナを意味することを知るひとは稀になり、ポピーを意味すると考える人が大半になった。ポピーの種はカラシナの種より小さい。おそらくポピーの種が日本人に知られるようになったとき、カラシナの種は「最も微小な粒」の資格をポピーの種に奪われたのだろう。この変化が起きたのはいつであろうか。

江戸時代の諦忍妙竜(1705-1786)はその『空華談叢』第二の〈白芥子開塔〉の項でつぎのようにいっている。「いぶかし。白芥子にいかなる功能ありてか、かくのごときの靈験あるや。また芥子は罌子粟か、蔓菁子か。従来、諸方の大徳に問えども、分明に答える人なし。請う、詳に開示せよ。答う、白芥子は計^{ケシ}之にあらず。奈多^{ナダ}禰にあらず、加良志なり。云々。」(大日本佛教全書 149)

これをみると、江戸時代中期にはすでに混同が起きていることがわかる。そこで、それよりも古い日葡辞書(1603)を見ると、日本語 *qexi* に *dormiferum* という訳語が与えられている。*dormiferum* はポピーの学名中の *somniferum* と同義の語(ともに「眠りをもたらす」の意。*dormi-* < Lat. *dormire* 'to sleep' ; *somni-* < Lat. *somnus* 'sleep') であるから、これは明らかにポピーである。国語辞典や植物辞典の多くがポピーの日本への導入の時期を室町時代としているが、たぶん当たっているであろう。

『空華談叢』に「いぶかし。白芥子にいかなる功能ありてか、かくのごときの靈験あるや」といい、答えとして「からしはその性からく、堅くして降伏の徳用を備えたり」といっている(第3節末尾の「大日經義釈」参照)。また、芥子の種を焼いて煙を服に染み込ませれば邪鬼を払うことができるともいっている。望月佛教辞典には、白芥子がないときは菜種を用いてよいとある。菜種にも辛みはある。さらには、唐・不空訳『金剛頂經義訣』に「竜猛は白芥子七粒をもって南天竺の鉄塔を打ち、その門を開いた」とあり、「大唐西域記」駄那羯磔国(ナダニヤニヤニヤ)の条に「清弁が芥子に呪文をかけて石の巖壁を擊つと、壁が開き、中へ入った。壁はまた閉じた」とある。芥子の種にこのような力があるとされるのは、その辛さによることもさることながら、その小ささにもよるのではないだろうか。小さいのに大きな力をもつところに神秘性がある。もし芥子が大きな粒であったら、芥子がこのように神秘化されることはなかったのではないだろうか。ちなみに、アリババの「開けごま」の話(9世紀)はインドの「岩壁を開く芥子」から着想を得ているように思われる。インドは説話文学の宝庫とされ、その影響は世界の説話文学に及んでいるとされるから、そう考へてよいだろう。

注)

- 1) ここにあげたような種子を実物で見るのは今日の日本ではむずかしい。これらの植物は日本の農家ではもはや栽培されず、種子は外国から輸入され、多くが加工された状態で店に並ぶからである。私はこれらの種子を写真に撮ろうとして集めるのに苦労した。カラシナの種はスーパーに並ぶ「あらびきマスタード」の瓶の中にあった。種苗店に陳列されている「黄からし菜」の袋の中にもあった。ポピーの種はアンパンの表面にまかれている。私はパン屋さんでポピーの種を分けてもらった。キビ、アワ、ヒエはベットショップで鳥の餌として売っていた。コメについては、本論のチャーンドーギヤ・ウパニシャッドに出る「こめ粒」に合せてインディカ米を探した。数年前、日本の米が不作のとき、大量に出回っていたタイ米（インディカ）は、いま秦野や伊勢原あたりのスーパーからはまったく影を消している。取り寄せるのも容易でなかった。私は結局、都内のエスニック食品店でタイ米を入手した。小麦の種は近くの農家から分けてもらった。胡麻、大豆、小豆はスーパーの食品売場で簡単に入手できた。
- 2) 「一粒のカラシナ」はギリア語聖書で $\kappa\circ\kappa\kappa\psi\sigma\iota\nu\alpha\pi\epsilon\omega s$ である。ヘニングはこのギリシア語（sinapi）を語源的にサンスクリット語 *sarsapa* に関係づけている。
W.B.Henning : A Grain of Mustard, Acta Iranica 15, 1977, pp. [610] – [612].
- 3) コーランの訳文は井筒俊彦『コーラン』岩波文庫による。ただし井筒氏の訳語「芥子」は議論の混乱を避けるために「カラシナ」に変えた。
- 4) 望月仏教大辞典は「ケシ」の項で、けしを *sarsapa* としながらも、その学名を *Papaver somniferum* としている。カラシナとポピーをめぐる混乱は相當に根深いものがある。